
羽の生えた悪魔

ふなむし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羽の生えた悪魔

【Nコード】

N9636V

【作者名】

ふなむし

【あらすじ】

舞台はアメリカ。ある日、スリ常習犯の男に一枚の手紙が届く。「おめでとうございます。あなたは悪魔候補生に選ばれました」。そこで男のとった行動とは……。

天使と悪魔の境界線に迫る痛快ファンタジー！君は悪魔か天使か……。

8時24分。

ラッシュアワー。

自宅にほど近い私鉄の環状線に乗り込む。

これが私の日課である。

電車の中は人がごった返し、それぞれが自由に呼吸する隙間さえない。

私は狭い車中を見渡し、先ほどホームで目を付けておいた力毛を探す。

足腰が不自由そうな杖をつく老人。

若い女に見とれているケミカルウォッシュのジーンズをはいた青年。

それに気づかぬ、しかめつらしたハーフパンツの女。

……彼らの共通点。

それは、後ろポケットに財布をむき出しにしていることだ。

私の仕事は、混雑に紛れ、彼らの背後に潜り込んで、ポケットから財布を抜き取ること。

仕事はものの三分で終わる。

普通、仕事というものは大体若い者が有利だが、この仕事の場合、老人であることはアドバンテージになる。

というのも、万が一、相手に財布が抜きとられたことがバレた場合、第一に疑われるのはいかつい顔をした若者と相場が決まっている。

よもや、よぼよぼで温厚そうな顔をした老人が犯人だとは思わない。

相手がもしかして、この老人じゃないかと疑いの目を持ち始めたころにはもう遅い。

それは私が財布を地面に捨てて、証拠隠滅した後だ。

この技を思いついて今まで、一度たりともポリメンにお世話になったことはない。

複雑なテクニックは必要ないのだ。

子どもじみてシンプルだからこそ、相手の盲点がつける。

そして、シンプルこそ最強なのだ。

高級そうなカシミアのコートを着た白髪の老人が、今日のところ狙い目。

老人はカモの中でも特上だ。

反応が鈍く、財布が抜き取られたことも気づきにくい。

その上、老人の財布には現金がたんまり入っている。

これは現金専門の私としては、とても助かる。

カードなどは金を下ろしたりという過程で足がついてしまうことが多い。

そんなリスクは負えない。

だから、現金を抜き取った後は、カードも財布と一緒に捨てる。

ローリスクハイリターン。

こういう意味でも老人は旨味が多いと言える。

しばらくこの稼業をやっているが、いつも実行の前は緊張で手が震え、嗚咽が止まらない。

自分でもそのざまは、麻薬でイカレちまったドラんカーの様だと思
う。

だけど、不思議なことに、俺が相手の背後に潜り込む瞬間、ピタリとその震えは止まる。

……天性の才能なんだろう。

犯行中、私の手は別人のようになり、淀みなく相手の財布を抜き取る。

もはや、それは患者の腫瘍部分だけを的確に切りとる熟練の外科医のようだ。

幸か不幸か、客観的に見て、私の腕前はすば抜けている。

私は選ばれた人間。

運命に逆らうことはなどというバカなことはしない。

選ばれたものとしての責務を果たすだけ。

そこに罪悪感などあるはずもない。

「へいッ、サラダロールお待ちッ」

店内に威勢の良い声がこだまする。

ここはカンザシティにある日本風のすしバー。

店内にはいたるところ、SUSHIと仰々しいローマ字が並ぶ。

日本風と言うだけあって、それはアメリカ人がイメージする日本であり本物のそれとはだいぶ違う。

店主は日本人のはずだが、そこら辺は商売のコツを心得ていてアメリカ受けのいい日本をあげすけに表現しているに違いない。

サラダロールの注文主の名は三村玄太。

ウールのガウンを着て品のあるたたずまいをしている。

ここら辺では珍しく、玄太は日本の老人である。

観光で若い日本人がここカンザシティに来ることはあるが、こと老人になると、これがなかなか居ない。

日本人のように見える老人は大体の場合、二世か三世の“えせ日本人”の場合が多い。

玄太は今日、“あがり”で、鮓を食っている。

鮓の専門用語だと“あがり”は、食後のお茶のことを指すが、玄太の職業でいうところの“あがり”は、もちろん食後のお茶のことではない。

玄太は今日、白髪の御老人のポケットから抜いてきた鱈皮の財布で会計しようと考えている。

玄太は灰色のトレイのような皿に乗った、食べかけのサラダロールを見た。

(……アメ公が作ったスシは食べたもんじゃない。反吐が出る)

玄太はいつも思う。

そもそも白米にアボガドとマヨネーズの組み合わせなど、日本人の美的感覚からほど遠いものだ。

このすしバーのメニューは先のサラダロールのほかに、シャケ、マグロ、タコ、イカ、ギョクがある。

サラダロールも不味いが、それ以外は特に不味い。

鮭や鮪は身がパサパサとして干からびているし、タコやイカはゴムを食っている方がまだましという有様。

玉子は美味くもないが、不味くもないという感じ。

だから、玄太はこのすしバーでサラダロールとギョク以外は注文しないことにしている。

「よお、スリーステップ。今日もハッピーかい？」

玄太に満面の笑顔を見せて話しかけてくるのは、玄太の同業者のボ

ブだった。

真黒な顔に、笑った時に覗き見える真っ白な歯が印象的。

確かに見た目は若そうだが、実際のところ、外人の年齢と見た目の相関を玄太は良くわからないでいる。

ボブとはこのすしバーで偶然知り合った。

普段、仕事終わりには誰とも話さない玄太だが、ボブ自身が持つ楽しげで気さくな雰囲気、玄太のポリシーを曲げたのだろう。

お互い同業者ということが分かった後は、玄太とボブが同郷の知り合いであったかのように心打ち解けあった。

ボブの発した、スリーステップとは玄太の愛称。

三村という名前も関係なくはないが、その大部分は玄太の腕の良さを讃えるところからきている。

玄太はこのスラム界隈ではかなり名の通ったスリ師。

相手の背後に立つたら、相手が三歩進む前に玄太は財布を抜き取る腕を持っていた。

だから、“スリーステップ”。

玄太自身この愛称はそんなに悪くないと思っている。

今日も例のごとく、ボブとここで待ち合わせしていたのだが、彼はいつも玄太より50分遅れてやってくる。

それでも、それがさも当たり前のことであるかのように、今日もボブは玄太にハッピーかい？と聞いてくる。

集会の目的は決まっている。

財布を出し合って、どちらが多くのお金が入っているかを競うのだ。

財布は勿論、盗んできたものに限る。

自分の財布や自分の金を盗んだ財布に入れるのもダメ。

特に厳しく決めたルールではないが、ボブと玄太の間には暗黙の了解として理解されている。

そして、負けた方がここの食事代をおごらなくてはならない。

ボブは今のところ13戦9敗。

いい加減よせばいいものを、次は、次は、と玄太にくっついてかかる。

さらに、馬鹿なことに玄太は高級そうな財布を選んで出すのに、ボブはいつもぼろぼろの財布を出す。

こうなるとボブが負けるのは必定。

だが、いまだにボブは自分の敗因に気付いてる様子はない。

二人は黙って目くばせする。

これは慣習で勝負開始の合図になっていた。

いっせーのせ、で二人は財布をテーブルに置く。

玄太は鱈皮のブランド物。

向こうはいかにも使い古されてある合皮の財布。

……しかし、ボブの財布はいつもとは、少し様子が違った。

分厚いのだ。

朝刊でも折りたたんで入れているかのようにその財布はパンパンに膨れている。

ボブも玄太のとまどいに気付いたのだろう。

いつも以上にその白い歯を玄太に見せて、先ほどからオーマイゴッドと何度も繰り返している。

(お前が持ってきたのに、なんで驚いてるんだよ)

玄太は、ボブの底意地の悪さに、唾を吐く。

財布は相手に見せるまで中身を検めないことになっていた。

だから、玄太は自分の財布にいくら入っているのかも知らないし、それはボブも同様だ。

だから、開けてみるまで分からない。

実際、玄太はボブの財布を確かめるその瞬間まで、本当に朝刊のよ
うなものが入っていると思っていた。

まさかこのおんぼろの財布に大金が入ってるなど夢々思えない。

だが、玄太の憶測に反し、ボブの財布には百万ドルと羊皮紙が入っ
ていた。

ボブが百万ドルを手にして、その紙幣を明りに透かして紙幣の真偽
を確かめている瞬時の間。

玄太は羊皮紙をかすめ取った。

ボブは羊皮紙などお構いなしの様子で紙幣を引っ張ったり、くしゃ
くしゃにしている、

……手が勝手に動いたのだ。

それは玄太の意思ではない。

スリ師の本能というものだろうか。

玄太は百万ドルよりもこちらの方が貴重であることを、考えるより早く体が理解していた。

「どうやら、今日は俺の勝ちのようだな」

ボブは満面の笑顔でそう言い残し、「何枚あるか確かめてくる」と、トイレに向かった。

その際に玄太は羊皮紙に書いてある文字を読む。

(なに、重要なものでなければ、再びボブの財布に返せばいいだけの話だ)

玄太はそうやって自らに言い聞かせるように、ひとりごちる。

「おめでとつごぞいます。」

あなたは悪魔候補生に当選されました。

数多くの悪人の中から吟味の末、選ばれたあなたは一億分の一の幸運をモノにしたことになりました。

今一度言います。

おめでとごうございます。

このように唐突にお手紙差し上げて、さぞびっくりされたことかと思えます。

そして、急に悪魔見習いになれと申しましても、一体何のことだと思われることでしょう。

ここで、少し悪魔というものについてご説明したいと思います。

悪魔とは、今回の手紙のように、人間の中から抽選で選ばれます。

なので、悪魔とは化け物、妖怪の類ではありません。

れっきとした人間なのです。

悪魔の仕事は、とても簡単。

世界に不幸の種をばらまくことです。

別段意識される必要はありません。

普通なされていることをされればいいだけです。

今までの生活がこれを機にガラッと変わるといふことではないでしょう。

勿論、ただで悪魔になれとは申しません。

悪魔役には特典が与えられます。

あなたが行う悪事の大小に比例して、私たちの機関から、あなたの口座にお金が振り込まれます。

これは我々からあなたへ渡される特殊な報酬ですので、所得税を払う必要ありません。

すべてあなたの取り分。

とりあえず、あなたの口座にはすでに1万ドル振り込んでおきました。

これは迷惑料と、これから悪魔としてご活躍されるあなたへのハナムケ料です。

……ただ、一つだけ。

試験があります。

ボブを殺して下さい。

三村玄太さん。

それが、あなたの悪魔見習い卒業試験です」

途中から、玄太は手紙の内容など、目が滑って読めなかった。

ただ、手紙に記載された三村玄太という名前だけが薄ぼんやりと頭に残る。

何故、この手紙は俺の名前を知っているのか……。

考えられないことである。

とくに、ボブのいたずらということでもなさそうだ。

ボブの態度に不自然なこわばりはなかった。

長年の経験から、よからぬたくらみを持つ前の独特の雰囲気や玄太は熟知している。

ボブではない。

それに、手紙の内容はボブを殺せというものだ。

こんなジョーク、ボブが思いつくはずもない。

だとしたら……。

本当に……、俺は悪魔に選ばれたのか……。

玄太には娘がいる。

38歳で、サトコと言う名前である。

賢く、人に騙されぬ子にならぬようにと、「聡い」という漢字をその名に含めた。

これほどの皮肉はないだろう。

娘に騙されぬようにと名前を付けた親が、今度は人の金を騙しかすめ取るようなつまらぬスリ師になってしまったのだから。

……しかし、玄太も好き好んでこのようなみじめな仕事を選んだわけではない。

娘が癌と言う業病にかかった。

この時代、日本にはまだ、白血病をなおすだけの薬がなく、効果のあるものと言えば、外国の薬を使わなくてはならなかった。

だが、外国の薬は、保険の適用外。

莫大の費用がかかる。

玄太の貯蓄など、ものの数カ月で底を尽きた。

玄太はマジシャンだったので、海外でアメリカンドリームを掴み、
聡子の薬代にしようと考えた。

勿論、アメリカにわたる意味はそれだけでなく、聡子の薬を直接ア
メリカで手に入れるという目論見もあった。

だが、当たり前と言うべきか、玄太のマジックはアメリカで通用し
なかった。

玄太のマジックの腕前は、確かに一流であったが、この時、まだア
メリカに日本人を受け入れるだけの土壌はなかった。

日本人なら、イエローモンキーと呼ばれるのが当たり前前の時代であ
る。

現実、玄太の所属するマジッククラブで、玄太より数段マジックの
へたくそだったアメリカ人がそのスターだった。

ただ愛嬌だけが取り柄の男。

確かに、玄太にもう少しばかりの愛嬌があれば、日本人への偏見と
いう壁も、取り除けたかもしれない。

だが、そうはならなかった。

なりゆき、玄太は、マジシャンを止め、闇の世界に手を染めること
になった。

要するに、今玄太のやっているスリ家業である。

その点、玄太はスリに置いて驚異的な才能を発揮した。

マジックで培った器用さが、幸か不幸か玄太を救った。

玄太は現在、スリでためた金を薬に変え、日本にいる聡子に薬を送っている。

そんな時、玄太の目の前に一通の手紙が現れた。

悪魔になれという趣旨の手紙だ。

一度闇に染めた体。

今更、悪魔になれと言われたって、別段抵抗はない。

玄太は心を鬼にして、ボブを殺すことに決めた。

「合格です。」

首にフォークが突き刺さったままボブはすっと立ち上がって、そう言った。

「おいおい、冗談はよせよ。何が合格だ。首にフォーク刺したのに、痛くねえのかよー!」

ボブは玄太の言葉など聞いてないかのように続ける。

「ボブを殺すまでの流れは違和感がなく、及第点です。

ただのスリ師にしておくのが勿体無いくらいだ。

後は情を無くすことですな。

あなたは二度ばかり私の見せた隙を、ボブへの情から躊躇した。」

ボブの体から玄太の知らない声が発せられる。

(それにしても、こいつは何で生きてるんだ?)

玄太の頭は混乱の渦に巻き込まれて、今だまともに思考することができずにいる。

「悪魔見習い卒業おめでとつございます。

あなたはもう立派な悪魔です。

これは今回の報酬です。

お受け取り下さい。」

そういつて奴は自分　あるいはボブ、の後ろポケットから財布を取り出す。

「業務は今後も継続で宜しいですね？」

約束通り、報酬は口座に入ります。

質問はありませんか？

無いならこのまま帰りますが」

玄太は散らかった思考を懸命にかき集めて、言葉にする。

「…ち、ちょっと待て。

お前は何者なんだ？

悪魔なのか？

それに何故こんなこと……」

一拍の間。

男は困った顔をして答える。

「ボブは私の仮の姿。そして、私は悪魔ではありません。」

……悪魔の逆。

つまり、天使です。

何故こんなことを、と言われますが、悪魔養成はれっきとした天使の業務の一環なのです。

人間は不幸を感じなければ幸福も理解出来ぬ愚かな生き物。

幸福を大量にばらまくより、不幸を多くばらまく方が効率的。

だから、あなたのような人間を悪魔としてスカウトするんです。

その方が天使のありがたみが分かるでしょ？」

（なんて身勝手なのだろうか……）。

天使は幸せを運ぶものだとばかり思っていたが、実際にはそれと逆のことが行われている。

所詮、天使と人間は別の生き物なのだ。

きっと、彼らにとって人間とは家畜のような存在でしかないのかもしれない）

玄太が何も言えず黙っていると、天使は付け加えるように言う。

「昇進すれば悪魔の次は見習い天使です。

頑張ってください」

そう言い残し、ボブの体から灰色の翼を生やして飛び立っていった。

玄太は路地を抜け、街に向かう。

聡子の薬を買うために、行くのだ。

百万ドルを手にした今、聡子の薬代を買う金は十分すぎるほどある。

悪魔になったものの、もう玄太に金は必要がない。

スリもやめるつもりだ。

そして、何より、馬鹿らしくなった。

今まで自分が行っていた悪事が、あの忌まわしき天使の為になっていたかと思うと反吐がでる。

俺は天使の操り人形なんかではない。

町に着き、薬を購入した帰り、玄太は日本行き飛行便を予約した。

日本では聡子が、玄太の帰りを待っている。

玄太は息を弾ませ、その足は自然と小走りになった。

……どうせ、予約時刻までロビーで待たなければならないというのに。

「イヒヒ。また一人、悪人を更正させた。

後三人で天使見習いを卒業して天使になれる……」

玄太の乗る飛行機が離陸する時。

遙か上空、天使のいやらしい声がこだました。

もちろん、その声は機内にいる玄太には届かない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9636v/>

羽の生えた悪魔

2011年10月9日14時44分発行